

無題

東京都 三上 美佐男

ソ連軍が国境を越え、関東軍に対して一方的に戦いを挑んできたのは、我が軍がアメリカなどの連合国に無条件降伏をする一週間前の昭和二十(一九四五)年八月九日であるが、その時、私達幹部候補生は、戦争が始まったのも知らずに、暢気にフラルギの嫩江で架橋訓練を受けていたのである。

不意をつかれた関東軍は、ソ連軍の怒涛の攻撃と蹂躪になすすべもなく敗退し、戦いの犠牲になった同胞の血によって、それまで緑豊かな満州の大地が赤黒く染まったことは、容易にうかがわれ、激動の昭和が去り、平成の新時代を迎えた今も、六十余年前の地獄の戦場が生々しくよみがえってくる。

私の原隊は、綏陽の第六三三工兵部隊であり、

部隊長は、かつて「肉弾三勇士」の分隊長だった内田少佐である。

部隊は転戦中にソ連の戦車隊と激戦を交え、私が内務班長時代に短期教育をした第一内務班の年若い初年兵たちは、勇猛果敢に教科書どおりに戦い、悲しくも散り急いだという知らせを牡丹江の駅頭で奇蹟的に生還した内田部隊長から聞き、思わず絶句したが、その時のショックは、今も、私の心の中に、戦争に対する憎しみと一緒に同居している。

敗戦は、好むと好まざるとにかかわらず、生き残った私たち幹部候補生を虜囚という暗転の世界へ追い込んだ。私にとって、シベリアという永久凍土地帯での抑留生活は、生と死とイデオロギーを賭けた人生最大の試練だったことは確かである。

ソ連極東軍政治部は、私たち日本人抑留者を反軍・反帝へと洗脳するため、イワン・イワノビッチ・コワレンコ中佐を発行責任者とし、編集委員長にツリロコフ大尉を任命して、ハバロフスク市

レーニン街に「日本新聞社」を設置し、日本人抑留者の中の親ソグループの協力を得て新聞を発行したが、このプロパガンダが引き金になって、シベリアの各収容所に「日本新聞友の会」が誕生し、反動分子摘発の「赤い民主化の嵐」が吹き荒れ、やがて、悲しい戦友相克ののろわしい絵図が描かれるようになったのである。

この時の日本側の責任者は、ソ連軍政治部と密着して権力を欲しいままにふるい、一時「シベリアの天皇」と恐れられた諸戸文夫こと浅原正基（昭和十五年東大卒）であった。

私は、直接、浅原から反動のレットテルを貼られたわけではないが、昭和二十二年五月、私の中隊は作業ノルマが評価されて帰国することになり、ナホトカまでたどりついたその夜、民主グループのオルグに「抑留生活の総括」を迫られたある隊員が、ものの考え方が教条主義的なオルグに対し「オレは日本人だ。日本へ帰れば日本人の生活を」と反発したことが問題となり「ミカミ中隊

は反動だ、学習が必要である」と批判され、翌日、着岸している帰国船に乗ることができなかったばかりでなく、ナホトカから約三十里離れたソ連極東軍高射砲部隊が管理する山奥に逆送されてしまったのである。

このため、帰国は約六カ月遅れたわけだが、逆送後の生活は、幕舎生活であり、仕事は伐採、その合い間に政治部将校が一カ月に一度持参する「ソ連共産党史」「レーニン主義の諸問題」「ソビエト憲法」「弁証法的唯物論」などなど、頭が痛くなるような本をタタキ台にした学習のあけくれだった。幸い一人の落伍者もなく、昭和二十二年十一月二十五日、大拓丸で故国の土（舞鶴）を踏んだが、逆送された時の教訓を生かし、二度目の帰国命令を受けた時は、終始「反軍・反帝」のお題目を唱えて乗船したことは言うまでもない。

シベリアで死の呼び声と闘い続けた青春の試練は、帰国後の人生の指標となっただけに、綏陽・チチハル・シベリア時代のわが青春に悔いなしと

言い聞かせている次第である。

無題

静岡県 山口 宗

シベリア五年間の生活を思い起こし、記憶によみがえってくるのは、昭和二十(一九四五)年十一月牡丹江を出てシベリアに入り、石炭云々で上官に顔を殴られ鼻血を多く出し、目のふちが黒くなる程、発熱して食欲ゼロ、ハバロフスク十一月二十五日。生ある限り忘れる事のできない日。

有熱患者は下車、五人降ろされハバロフスク病院に。歩行できず雪のちらつく実に寒い中、ジープで運ばれた。

ロシア語が通じず手まねで病院に入れられ、五人部屋は、満州人・朝鮮人ばかり。時に耳に入ったのが三人死亡したこと。あとは渡辺と自分だけと言われた時、俺は死ぬのだと直感した。氷で光る床を、やっと這いずりトイレに行く。朝食の黒パン・角砂糖はすぐに持ち去られ何も食はず。